説教要旨『命の出どころ』

マタイによる福音書　２２章１５～２２節

「皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていないでしょうか」。ローマ帝国に納める税金は、ユダヤの人たちを経済的にも宗教的にも苦しめる問題でした。その質問に対するイエスの答えは「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」でした。「神のものは神に」という言葉は、ユダヤ人たちに人の創造物語を想起させます。「神はご自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された」という創世記１章の言葉は、神にかたどられたという肖像と、神に創られたという銘が私たちに刻まれていることを伝えています。銀貨は皇帝の肖像と銘が刻まれている「皇帝のもの」であるが、私たち自身は、神の肖像と銘の刻まれた「神のもの」であり、その「神のもの」は「神に返」されるべき大切なものであることをイエスは示します。当時、ローマに税金を払えない者は、耕作地を手放し、娘を売り、最後には自分自身を奴隷として差し出しました。ユダヤ人の生活、命そのものが「皇帝のもの」になっていたのです。

私たちもまた、神ではない他者に価値をつけられ、簡単に捨てられる、そんな現実に生きています。1994 年に、大河内清輝さん（当時 14 歳）がいじめを苦に自ら命を断つ事件が起きました。遺書の封筒の裏側には、こう書かれていました。「お母さんは昔、教会に連れていくって言っていたことがあったよね。あの時はとても行きたかった」。教会に行ったからと言っても現実は簡単には変わりません。それでも、他者に生活を支配され、喜びを奪われ、自分で何とかしなければならないと思わざるを得ない状況に立たされた 14 歳の子どもの中に「あなたは愛されている」という言葉が注がれていたら…と考えてしまいます。

ユダヤ社会を生きたイエスも、人の命が人の手によって簡単に奪われて行く現実を何度も見て来たはずです。その怒りと悲しみを込めて、イエスは「神のものは神に返しなさい」と、私たちの命の出どころを示していきます。それは神に創られ、最後まで十分に愛され、生かされる私たちの命の有り様にもう一度目を向けさせる言葉です。詩人の星野富弘さんのお母さんは、事故で生死をさまよう息子を前にして「我が身を切り刻んででも、生きる力を富弘の体の中に送り込みたい」と願ったと言います。イエスの十字架にも、「我が身を切り刻んででも、生きる力をあなたに送り込みたい」そんなイエスの願いが込められているように感じます。私たちの命の出どころには、そのイエスを送ってくださったほどに私たちを愛される神の姿があります。この社会の中にあって、教会は、教会だけは、神が創り愛される「神のもの」たちを「神のもの」として受け止め、迎え入れていく群れでありたいと願い続けます。

（文責：望月奈津子牧師）